

公共的世界と向き合いながら進めてきた考古学研究

— 安藤広道

文学部民族学考古学専攻 教授

私も学生たちも、考古学の既成概念にとらわれず、まずは知りたいことを中心にテーマを設定し、研究に取り組んでいます。

私は同僚の教員から、飽きっぽい研究者と言われることがあります。

確かに、私がこれまでに行ってきた研究は実に多様です。縄文時代から近現代に至るさまざまな遺物や遺構を対象にしてきたほか、時に中・近世の絵図の分析、森林・耕地の生産量調査、コクゾウムシの飼育実験、GISや3D技術の利活用など、これが考古学？というような研究にも取り組んできました。

ただ、これは私が飽きっぽいからではないのです。私は、教員になる前に、自治体や国で遺跡の発掘に関わる仕事や、博物館の学芸員をしていました。こうした仕事では、専門分野に関係なく、どんな遺跡も調査・研究しますし、収蔵資料についてのさまざまな疑問に答えていかなければなりません。それらに真摯に向き合い続けてきたら、いつしかこうなったというわけです。

その後、2004年に義塾に戻ってきて、こうした研究人生ともおさらばかなあと思っていた矢先、今度は義塾が創立150年を迎え、記念事業の工

事で壊されてしまう遺跡の発掘に携わることになりました。日吉と矢上で弥生・古墳時代の遺跡の発掘をしたほか、日吉では今も海軍の地下壕の調査が続いています。最近では三田で、やはり工事で壊される古代・近世の遺跡を発掘し、その研究に取り組んでいます。

加えて我々の専攻には、過去の調査で出土した、膨大な量の遺物が保管されています。博物館学芸員経験者のさがないのか、それらの整理と研究も私の大きな仕事のひとつになりました。

何だかずっと求められるがまま流されてきたようでもあります。こうした姿勢を続けてきたおかげで、私は、自身の研究が、学界内よりも公共的世界においてどんな意味を持つのかを、強く意識できてきたように思います。

こうした私にとって、学生たちは学術と公共の間にいる大切な存在です。学生の目線や反応、関心をもつテーマの多彩さとユニークさは、いつも私の研究・教育姿勢を見直すきっかけになっています。それが私の半学半教です。

自ら開く、考古の扉

まつい ともき
松井智輝君 文学部民族学考古学専攻 4年

私が所属する安藤ゼミは、主に日本の考古学を研究するゼミということになっています。ただ、研究テーマはかなり自由です。

個人発表では安藤先生はもちろん、大学院生の先輩方からも多角的な質問や助言を多く頂けるため、研究が行き詰まっても打破する契機をつかむことができます。特に、安藤先生は幅広い研究テーマにも寛容に対応してくださる上、良い方向へ“導く”ような助言をくださるため、自らの手で研究を進めているという実感を持てます。

穏やかで比較物的静かな雰囲気がありますが、ゼミ生の研究に対する真摯さが故のことではないかと思っています。



外科手術でしか救えない命と向き合う

北川雄光 きたがわゆうこう
医学部 教授

一般・消化器外科は、手術でしか救えない命を救うべく、臓器別グループの縦糸と臓器を越えた横糸の総合力を結集し診療・研究を行っています。

一般・消化器外科は、食道、胃、大腸、肝臓、胆道、膵臓、乳腺、血管のさまざまな臓器・疾患の診断・治療を行っています。また、臓器別グループとは別に、臓器移植、腫瘍学、生理機能、感染・代謝栄養、先進的医療機器開発、再生医療など総論的な研究グループを編成し、臓器横断的な研究を行っています。縦糸と横糸が織りなす強

固で幅広い一般・消化器外科の診療・研究体制で、最高の外科医療を患者さんに提供できるよう努力しています。

上部消化管班、大腸班は、食道がん、胃がん、大腸がん、炎症性腸疾患など多様な良・悪性疾患を対象に、手術支援ロボットやリンパ流、血流ナビゲーションシステムなど先端技術を駆使して患者さんごとに個別化した最適・最良の医療を提供できるよう努めています。肝胆膵・移植班、血管班は、重要血管に浸潤した進行がんを血管合併切除を併用して根治切除するなど、他の医療機関では扱うことができない高難度手術にも積極的に取り組んでいます。

また、余命わずかとされる末期肝硬変・肝不全患者を生体・脳死移植で救命する医療も実施しています。乳腺班は、乳がんの根治を目指しながらも整容性も温存するバランスのとれた手術療法、薬物治療を実践しています。

慶應義塾大学病院は、2018年2月がんゲノム医療中核拠点病院に指定されており、がんゲノム医療班は、がんの遺伝子変異情報を解析することで患者さんごとに最も適したがん治療薬を策定する「ゲノム医療」の研究を推進しています。再生医療班は、臓器不足で移植を受けられずに多くの患者さんが命を落とす現状を打開すべく、人工臓器の開発に挑んでいます。また、先進的医療機器開発グループでは軟性内視鏡を用いた新たな手術支援ロボットの開発を行いました。外科学教室は、今年2020年に創設100周年を迎えます。一般・消化器外科は、次の100年においても患者さん中心の最新・最良の外科医療を提供できるよう一丸となって努力してまいります。

最高の外科医療を求めて切磋琢磨

たけうちまさし
竹内優志君 医学部助教 (2019年3月まで医学研究科博士課程在籍)

当教室では、消化器がんをはじめとした各種消化器疾患から臓器移植、乳腺、血管など多岐にわたる疾患の診療・研究を行っています。他の施設や研究室とも連携してさまざまな基礎・臨床研究を展開しており、標準治療を安全に施行するだけでなく、最高の外科医療の創出を目指して活動しています。特に我々若手世代の育成システムは大変充実しています。早期から豊富な手術経験を積むことができるプログラムに加え、海外を含めて多くの研究発表の機会が与えられます。北川教授のご指導の下、新しい分野にチャレンジし、その成果を世界に向けて発信することができる環境の中で、指導医も我々レジデントも充実した日々を過ごしています。

